

上川アイヌと和風住宅

旭川市博物館

私が住んでいた給与住宅は、桁屋根で外壁は下見板張り、それも節穴だらけで時にはこの節穴に鳥が巣を作ることもあるほどでした。中の板は縦張りですが、板と板の間は反っていて、子供の指ならそっくり入るほどですから、隙間風を防ぐための新聞紙を、一面にべったりと張っていました。

…茶の間の真ん中には大きな炉があり、薪ストーブが置かれていましたが、煙突が真っ直ぐ屋根上にでていましたし、何よりも天井板を張っていないのですから、熱効率が悪くストーブからの直接の暖かさだけで熱をとるのです。

寒中はストーブに向かって座ると顔が焦げるほど熱いのに、背中の方は隙間風でとても寒かったものでした。吹雪の日などは窓や壁の隙間から粉雪が吹き込みそれがストーブの上で「ジュッジュッ」鳴ったものです。だから皆、厚着をして着ぶくれしていましたし、子供らは背中に野兎やチンチラ兎の毛皮を内側に縫いつけたのを着ていました。

伯母テキシランの家は、昔ながらの笹小屋で、入口はカヤのすだれを下げただけであり、暖房は囲炉裏の焚き火でしたが、この方がはるかに暖かかったものでした。

記録によれば「給与住宅は寒いので、これを物置きとし、住む家は再度笹小屋を建てている者もいた」とありますが、たしかに内地式のバラックのような家では厳寒の暮らしには不向きですが、理由はそれだけでなく、アイヌの神々の中でも最も大切な火の神（アペフチ）をストーブの中に閉じこめなければならないので、当時のアイヌにとってこれほど困ったことはないわけで、古来の生活を守りたい頑固な人が、再び笹小屋を建てて暮らしたともいえるでしょう。

私の伯母テキシランはその最たる者だったらしく、酒はもちろんのこと日常の食事にしても、ご飯をはじめ、魚や野菜などを（火の神に捧げるため）最初に焚き火の中に入れてからでなければ、決して食べませんでした。

私の母も「火が見えないのは寂しい、といってストーブの前蓋を開き、部屋中を煙りだらけにして中の火をのぞいて満足していたフチ（おばあさん）がいた」と話していましたが、今の私には胸が痛くなるほど、この人たちの気持ちが伝わってくるのです。

